

## 手触りの差異 安田百合絵

前回の時評で青春を詠うことについて書いたが、年齢を重ねることが歌にどのような趣を加えるのかについての例のひとつを、今年三月に上梓された大辻隆弘『景德鎮』に見たように思った。偶然、処女歌集『水廊』を読み返した直後に手に取った著者の第八歌集は、歳月を経て変化したもの、そして変化しなかったものを思わせて興味深い。

・あかねさす真昼間父と見つめぬる青葉わか葉のかがやき無尽  
 ・山羊小屋に山羊の瞳のひそけきを我に見せしめし若き父はや  
 と『水廊』で詠まれた父は、『景德鎮』でその死を看取られる対象として描写されることになる。

・わが庭に芽ぐみし父の梅の鉢を父に見せしむすべのあらなく  
 ・胸水が左の肺を圧しつづす苦しき息を聴きぬたるのみ

死にゆく父の姿を、残酷さと境を接するまでに克明に記録する一連の歌群は、

・花蘇枌幹より咲きてうらわかき父たりし日の吾にありにき

として、自分のうちにある「父」の要素、死者との連続性への意識へと結びつき、来るべき自分の老いの予兆ともなっている。無論、年齢を重ねたことで歌に深みが増したなどというのは短絡に過ぎるが、ここで言いたかったのは、そうした作者本位な（作者の背景ありきの、作品論的ではない）読解についてはなく、

しかし、この二つの歌集がほとんど三〇年近い隔たりをもつて出版されているという事実を一旦措いてもなお感じられる、ある種の手触りの差異のようなものである。

本来的には、時評では現在の歌壇で話題になっていたりすることや、注目すべき新刊歌集・歌書などをとりあげて簡単に紹介し、注意を喚起すること、あるいは現在の歌壇の問題を提示することなどが求められているように見える。時評を一年書くなかで、そうした視野の大きな分析のためにはたえず新しい本や雑誌に目を通していなければならぬということを感じたが、残念ながら最後までそれは果たせなかった。歌壇の趨勢という意味でのアクチュアリティをどこまで持ち得たかは、その意味で甚だ心もとないと言わなければならない。

ところで大辻は、大学院時代には現象学を専門としていたという。埋草として、現象学を大成させた哲学者の一人、フッサールの有名なエピソードを本稿の最後に引いておきたい。

フッサールが子ども時代の思い出を語ったことがある。小刀をプレゼントされたエトムント少年は、それを繰り返かえし研いでいるうちに、小刀の刃がすっかり磨りへつてしまったことに気がつかなかった。そのエピソードを語ったフッサールの顔は悲しげであつたとつたえられている。

（熊野純彦『西洋哲学史 近代から現代へ』）  
 いささか牽強附会にすぎること承知で言えば、歌を詠むことはエトムント少年のように研ぎすまし、削ぎ落としてゆく行為でもあるのだらう。その削ぎ落とすうちに宿る豊かさに賭けることが、歌を詠む者に求められているのだと思う。